



ため、結局は福岡市の西部に落ち着くことにした。この場所を選定するに当り、市の中央部から約 5 km 間隔で、月明の無い晴夜に 35 mm 判 ($f=50$ mm, $F1.4$) に ASA=ISO 100 のフィルムを使用し 10 分間露出で星空の固定撮影を行い、夜空のフィルム上へのカブリの量を求めた。その結果、福岡市の中央部から約 20 km 西方の前原町以遠では、この条件をほぼ満足することができると判った。

こうして、福岡市の地下鉄線の延長線前原駅から北へ約 10 km、糸島半島の北西端にある標高約 100 m の小山を選定した (所在地: 福岡県糸島郡白志摩町芥屋エメラルド・パーク内 ($\lambda=130^{\circ}7'12''$ $\varphi=33^{\circ}34'12''$, 25000 分の 1 地図より))。この糸島半島は、あの有名な「魏志倭人伝」の中の「伊都国」に指定される場所の一つともいわれている所である。この場所は玄海国立公園の中にあるが、芥屋エメラルドパークとして分譲中であり、その一角にあたる。

周辺は、海に囲まれ、大気の流れも少なそうである。

3. 観測用ドームと機械

観測所の規模は鉄筋コンクリート 2 階建てとし、1 階

には準備室を兼ねた研究室と暗室、2 階は直径 3.2 m のドームにして望遠鏡を設置した。基礎は直径 60 cm の鉄円柱を建物のほぼ中央に配して、地下 4 m の岩盤からコンクリートで積み上げた。主要望遠鏡は 12 インチ英国製の特殊カセグレン鏡である。この架台は、前述の九大の屋上で使用していたものを移設して使用することにした。

光電測光による変光星の観測を、現在の主な観測目標として主望遠鏡をこれに当てるが、6 インチ屈折鏡を同架してガイド用とし、さらに今まで続けてきた気象学と天文学との関連についての研究にも用いたいと考えている。

九州大学農学部に置かれた天体観測室の歴史は、この新・私設観測所が開かれることによって、閉じられることになるかも知れない。しかし、1960 年に東京天文台が 74 インチ反射望遠鏡を購入することを決定し、その設置場所を求めてシーイング調査を行った。その時に使用された望遠鏡は口径 10 cm で焦点距離 150 cm、焦点面上で乾板を定速度で移動させる装置がつけられたものが 3 台製作され、長野県、静岡県、岡山県の 3 ヶ所で試験観測が行われた。74 インチが岡山に設置されることが決まった時点で、筆者はこの試験観測用の望遠鏡が北極に向けて固定され、北極星の星像によりシンチレーション等を測定するように設計されている点が、気象学にも応用可能と考えた。そして、今この望遠鏡の内の 1 台が九州大学に移管されている。

気象学と天文学——地表近くの環境とその延長上にある対象とは、密接な関連を持つものという筆者の考えは、今も変わっていない。

残るのは、九州大学農学部農業気象教室屋上に印された、記念すべき経緯度のマークだけなのかも知れない。(本誌第 68 巻 (1975 年) 表紙、アルバム及び本文“緑閃光とその観測”参照)

雑 報

小惑星 KOZAI (3040)

チリのセロトロ天文台で SAO の W. Liller が 1979 年 1 月 23 日に発見した小惑星 (1979 BA) に KOZAI という名前がつけられた (IAU 小惑星中央局発行の小惑星回報 9770, 1985 年 7 月 2 日)。SAO の Marsden により軌道要素が決められ、確定番号 3040 がついたのは 1984 年 5 月 12 日である (小惑星回報 8782)。この KOZAI とは現東京天文台長の古在由秀氏のことである。上記の回報によると、古在氏の太陽系内小天体 (衛

星、小惑星)・人工衛星の運動理論、小惑星の族の分類理論、人工衛星の運動の天文学、測地学への応用 (例えば地球ポテンシャルの決定) 等々の諸業績をたたえるために、JPL の Williams が KOZAI という名前を提案したとのことである。古在氏の軌道傾斜角、離心率が大きいときの小惑星の永年摂動理論 (1962) は、近日点引数が 90° または 270° のまわりを移動する小惑星があることを予想していた。小惑星 KOZAI は、まさに理論の予想通りに近日点引数が 270° のまわりを移動している特異な小惑星である。この点からも、小惑星 3040 が KOZAI と命名されたのは的をえているといえる。

(木下 宙)